

臨床心理学、コミュニティ心理学、社会福祉 における、“力強い”人間観

三島 一郎 (大東文化大学文学部)

Views of “Strong” Human Beings in Clinical Psychology, Community Psychology, and Social Welfare

Ichiro MISHIMA

はじめに

それぞれの技法や支援の背景には、必ず、援助場面に立ち現れた人間をどういう存在と見るかという、人間観が横たわっている。そして、その人間観は、それぞれの援助モデルを大いに規定する。

福祉の領域の議論を外から見ると、新しい考え方も概念も全てワーカー・クライアント関係の中に埋没してしまっていて、結局、元からある、援助－被援助の力関係からなかなか抜け出せないではないかと思わされることも多かった。

筆者自身も、大学院での訓練の過程で、指導担当教授から、「自分の持つ人間観と無理なく呼応する人間観を持つ技法を探しなさい。そして、それを見出したなら、それを徹底的に訓練し、免許皆伝まで行くように」と言われていたのを思い出す。そこでは当たり前のように、援助－被援助関係の中で、治療者が抱く人間の姿（人間観）が問題にされていた。

しかし、修士論文、博士論文で、セルフ・ヘルプ・グループ（以下、SHGs と略す）と、エンパワメントを取り上げる中で、専門職が一方的に援助観や実践モデルを規定しているのではないことに気が付いた。

SHGs の理解からは、コミュニティ心理学の領域でエンパワメントを初めて位置づけた Rappaport (1981) の主張に見られる様に、専門職は、80 年代に再び、社会的運動体の中で力を獲得していく「学習する主体としての当事者」に出会い、それまでの援助を求める人を弱い存在と捉え、彼らを非難するようなモデル (Rappaport, J. 1975 等) に代わり、エンパワメントを据えたと思われる。言わばエンパワメントは“力強い”人間観モデルと言える。

いずれにせよ、これら対人援助の領域において、人間がどういう存在として捉えられ、それによって援助－被援助関係がどのように影響され、援助の有効性がどのように規定されるのかを検討する

のは、重要な課題である。

特に今回の研究論文によって、臨床心理学、コミュニティ心理学、社会福祉といった近接諸領域の“力強い”人間観に注目して、横断的に検討したいと考えている。

I. 臨床心理学における人間観

①精神分析に見る人間観

ロジャースは、精神分析の持つ権威主義的あり様をしばしば批判し、自らのアプローチをその対極にあるものと位置付け続けた。

しかしながら、フロイトが、精神分析の場面に訪れる人をどう規定していたかを検討する時、フロイトの中にもロジャースの考え方に通じる様な人間観が存在していたことが確認できる。

フロイトは、精神分析に取り組む人は「自験者」でなければならない、とした。精神分析の場に通い続け、自らの課題に主体的に取り組み続ける、そうした強さを持った「自験者」でなければ精神分析という営みは成り立ち得ないとした(小此木啓吾[1994年5月]、慶應心理臨床セミナーにて)。

精神分析における自由連想法に見られる治療構造は、一見するとクライアントの自由度を奪い、セラピストに対する依存的感情を喚起するよう見えるが、フロイトの意図は全く反対で、むしろ治療者と対面することによって生じる分析医の個性による影響から患者をできるだけ遠ざけ、患者が自らの力で自己自身たらしめ、自らの全的存在を責任をもって誠実に自己のものとする事で治療に至らせることを狙いとしていた(台、2011、p.70)。

フロイトの人間観をあえてまとめるなら、人間を不可避な運命や閉塞に挑戦し可能性を探求すべきもの、あるいは、個人としてのとらわれから解き放たれて、世界人として自由に生きるべき存在と見ている。ただし、そこでは一定の社会適応が前提になっている。その適応はある種の中庸の維持である。

フロイトの人間観は、厳しさを通り抜けてようやく自由を得られるというのではないだろうか(台、2011、p.80)。

フロイトは「人間は厳しい試練に耐え得ないことを恐れているだろう。しかしそれでも希望を持つのではないか。人間が自分自身の力に頼っていると知っただけでも既に相当なことなのだ」と述べるのである(台、2011、p.81)。

②ロジャースの人間観

ロジャースは、人間を以下の様に規定した。

即ち、「人間は、生まれながらの学習者」「人間は、知覚したように行動する」「人間は誰でも、成長し発展し適応へと向かう資質を持っている」「人間とは、十分に機能する有機体」。

こうした人間観に立つからこそ、ロジャースの治療理論は極めてシンプルで、「純粹性」「無条件の肯定的配慮」「共感的理解」の3条件を、カウンセラーが面接場面の中で、基本的態度としてク

クライアントに提供することで、クライアントがそれらの条件を受け取れば、クライアントの変化（自己実現）は約束されているとする。

このことから、上記の3条件は、ロジャースの「来談者中心療法」とどまらず、広く、心理療法で変化が生じるための、非特異的要素とされ、これら3条件を抽出したロジャースの功績は、現在でも高く評価されている。

ただし、ロジャースの技法は、米国でも日本でも、一部で、その背景にある人間観や態度様式が十分に共有されぬまま、形ばかりを取り出した練習がなされ、それが臨床の場面で全く力を持たなかったという不幸な歴史を負った。

この事情に対して、日本に広くロジャースを紹介した友田（1970）は、その小冊子の中で、その辺りの事情を端的に物語っているロジャースの表現を引用している。

「非指示的もしくは来談者中心療法を、何かしら静的なもの、すなわち、一つの方法、一つの技術、一つの、いずれかと言えば硬直した体系、として眺めている傾向がある。真実以上のものは何もありえない。この分野において専門的に活動している人びとは、継続していく臨床的経験に照らして、不断に改訂されている力動的概念（dynamic concepts）を持って活動している。その図柄は、いずれかといえば、人間関係の問題に対する一般的な接し方におけるような、流動性のある転換をするものであって、いくつかの比較的硬直した技術が、多かれ少なかれ機械的に適用されるような事態（situation）ではないのである、云々。」と。（p3.）

台（2011）によれば、ロジャースの人間観はまずもって、人が自分のために自由に固有の価値や目標を選ぶのを許されるなら、その人は最も幸せになるということである。自己の潜在的な可能性が十分に発揮され、自己が十分に機能すること、つまり自己実現することで建設的人間として成長するが、それはやがて社会的にも成熟した人間に達する。こうして人間は、できるだけ自律的もしくは自己自身に責任をもつ方向を目指して成長していく（p.183）。

クライアントは治療の場において脅威から解放され、完全に受容された雰囲気の中におかれるなら、固い自己体制を緩め、自己の経験の場をいっそう十分に探索するようになる。自分が見ている自分自身や他人や社会を、現実といっそうよく照合して妥当な判断を得るのである。こうして、一段と豊かな社会性をもつように成長し、建設的な行動をとれるようになる。人間観と治療理論の関連は明らかである（p.183）。

治療関係において、自己にとって安全で何も脅威を与えない条件があれば、矛盾する経験も受け入れ、同化し、包含するように修正される。つまり、これは自己の再構成／再体制化といえる（p.184）。

人間は自由の場において自らを建設的に発展するとみるロジャースの人間観は、自分自身を開き受容していく自我の理論と結びつき、技法にもつながる。また、理論と技法も密接に関わる。要するに、ロジャースその人の人間観が、すなわちクライアント中心療法の人間観であり、技法、実践の場にまで浸透して活着していると言える（p.185）。

クライアントは自己にまともに対面する状況にさらされ、対決することになる。クライアントが

不安とか恐怖の事態に面と向かい—その人がその事態に、敢えてみずから積極的に参加し—恐怖をしっかりと受けとめるとする。それは、襲ってくる事態に対して自分の側からその恐怖に挑戦することであろう。そうしたはたらきは、その人によるその事態の統御につながるばかりでなく、同時に自分自身をも超える在りようである (p.199)。

ロジャースにとって、自我あるいは自己は諸体験を統合するものであり、その変容／成長は治療過程の核心だった。そして、晩年の「人間になる」という主張は“真の自分”に到達することであり、自己をありのままに受け入れて解放すると共に、他者／社会をも受け入れ、自己を世界へ向かって開くことを意味した (p.203)。

「この世界で、他の誰とも異なる、唯一人の存在としてもっとも自分らしく、自律的、主体的に生き抜くべきであり、またそうすることができる」というのがロジャースの人間観といえるだろう (p.214)。

Ⅱ. コミュニティ心理学における人間観

①地域社会中心主義

コミュニティ心理学を支える屋台骨と言ってもいい考え方に、「地域社会中心主義」という発想がある。これは、あるコミュニティの中に、何らかの生きづらさを抱えた人がいた場合に、その個人の中に問題を封じ込めるのではなく、その問題を、そのコミュニティに投げ掛けられた課題と考え、その課題の解決の責任は、そのコミュニティの成員全員が負うというものである。

この考え方は、専門家中心主義の対極にある。専門家中心主義では、問題解決の責務は専ら専門職が負うが、地域社会中心主義では、専門職は一市民として専門性を発揮する。

即ち、困難を抱えた人の周囲には、必ず彼らを支えるキーパーソンがいる。その支え手たちが効果的に機能できるように側面から支援するのである。この発想を体現したアプローチが、コンサルテーションである。コンサルタントは、コンサルティが、ケースにいかにか効果的にかかわり、課題解決ができるためにはどうしたらいいか、一緒に知恵を絞るのである。

②生活者モデル

それまでの、心理面接室をモデルとする心的内界モデルから、コミュニティに戻ってきた人々の地域生活を支える必要から、「生活者モデル」を採用し、問題の原因を個人や環境の中に探し出そうとするのではなく、うまくいってないのは個人と環境の不適合ととらえ、いずれをも責めず、個人、環境、そして、その相互作用にも介入し、個人と環境の適合性 (fitness) の向上を図るものである。

③コミュニティ心理学の定義 (山本、1986)

コミュニティ心理学を日本に紹介した山本 (1986) のコミュニティ心理学の定義を紹介したい。コミュニティ心理学が、人間をどうとらえ、理想とされるコミュニティの実現のために、コミュニ

ティ心理学者が、どのような機能と役割を負っているのか明文化されている。

「コミュニティ心理学とは、様々な異なる身体的心理的社会的文化的条件をもつ人々が、だれもが切りすてられることなく共に生きることを模索する中で、人と環境の適合性を最大にするための基礎知識と方略に関して、実際におこる様々な心理社会的問題の解決に具体的に参加しながら研究をすすめる心理学である。」(p.42)

当然ながら、他の研究者・実践家の定義もある訳ではあるが、山本(1986)のもの程、人間存在に肉迫し、理想的社会の実現、コミュニティ心理学者の役割に食い込んだ定義は、見当たらない。

④コミュニティ心理学におけるエンパワメント研究の動向—エンパワメントの理論面から

コミュニティ心理学の中にエンパワメントの概念を初めて明確な形で位置付けたのは、Rappaport (1981) である。ここでは、Rappaport の思想的流れの中に、“力強い”人間観に関わる部分が多く見出だされるために、Rappaport を中心に、コミュニティ心理学におけるエンパワメント研究の理論的側面の動向を探りたい。

i) エンパワメントと SHGs における十全たる人間観

コミュニティ心理学の中に、エンパワメントの概念を、初めて明確な形で位置づけて以来、Rappaport (1981) は、コミュニティ心理学におけるエンパワメントの理論的研究の第一人者であり続けている。

Rappaport (1981) によれば、従来のサービスは、人間を「ニーズ」を持つ者か、満たされない「権利」を持つ者と規定し、肉体的か精神的にハンディキャップを持ち、標準化 (normalization) されるか、保護 (protect) される必要のある者とする考えを内在していたとしている。

Rappaport は、こうした考え方を克服するパラダイムとして、十全たる人間として「力を獲得していくこと (エンパワメント)」を挙げ、人間が自らの問題を自ら解決し、自らの生活をコントロールする力を得、生活に意味を発見し、力を得ていくことで、コミュニティ感覚 (sense of community) を育てていっているプロセスを持つ、SHGs の働きに注目している。

ここに見られる様に、当初からエンパワメントの概念は、SHGs や相互支援 (mutual aid) といった当事者運動と密接な関わりを持って論じられてきた (三島、1997)。

社会的運動体の中で力を獲得していく当事者の姿に触れることで、専門職の援助モデル、その基底となる人間観が変わらざるを得なかったことが予想される。

ii) エンパワメントの術語の力

これまでは、援助を求める人々は、しばしば自らの失敗を非難し、成功は専門職のアドバイスのおかげであるということを受け入れるように、仕向けられてきた。

支援 (治療) 者の語りは、当事者の言葉の先を行っていたわけだが、当事者のエンパワメントが大事にされる文脈においては、当事者の語りが最優先される。

当事者の語りを、そして、当事者が自らを語る言語を、取り戻していくプロセスを重視した Rappaport (1985) は、伝統的な専門用語でなく、エンパワーメントの術語で考えることの重要性を唱え、医学モデルや従来のサービスモデルに対する痛烈な批判を展開する。

エンパワーメントの術語とは、公式の専門化された援助システムとは独立して、自身を助け得る自らの能力、他者を助け得る能力について、何らかのコミュニケーションをするアイディアのまとまりと用語、と説明されている。

例えば、Rappaport は、プラセボ効果^(注1)に対する代替的な見方として、self-healing (自己治癒) という考え方を提示する。Rappaport は、人々の自己治癒を利用できる能力を想定することによって初めて、エンパワーメントを、生活上の問題を扱えるようにする媒介物として、自己治癒の積極的な力を解放する媒介物として、語る事が出来るようになると主張する。

こうした術語における考え方の変容は、単に術語を変えるというレベルにとどまらず、「文化的代替物 (cultural alternative) を開発し、我々自身と他者をも助け得る我々自身の力に関する信念についてのシンボルと言語を創造」することにつながる。

そうした社会運動的なエンパワーメントのあり様も視座に入れて、Rappaport は、エンパワーメントの術語の開発を考えている (三島、1997)。

この主張に見られるような文化的代替物の開発には、エンパワーメントと SHGs との関連を強く意識させられる (三島、1997)。

つまり、エンパワーメントは、専門職との関係の枠組みを離れた所で使われてこそ力を発揮する。エンパワーメントを従来の援助枠組みの中に位置づけることは、エンパワーメントを disempower (無力化) させるだけである (三島、1997)。

iii) ヘルパーセラピー原則が発揮する力

Riessman (1985) によれば、SHGs は、援助を与えること (そして、そうすることによって援助されること：ヘルパーセラピー原則)、そして援助を受けること (そして、援助をいかに受けるかを知ること) を強調する。

人々は、ただ与えるだけ、あるいは、受けるだけよりも、与えもし、受けることもある方が、より大きな生活上の満足を得るという研究結果を報告する研究もある。それによれば、与えもし、受けることもする人は、self-esteem^(注2)が高く、うつ度が低いという結果が出ている。この結果は、ソーシャル・サポート研究へ大きなインパクトを与えた。何故なら、従来のソーシャル・サポート研究は、援助を与えることで援助されるという側面を検討の視座に入れていなかったからである。この結果は同時に、専門職への大きなインパクトともなった。というのも、より多くの専門職の時間を、一方的な援助より、相互的な援助を開発し、支援することに使うべきという反省が生じたからである。

援助の受け手とだけ一方的に規定され続けてきた人々が、問題や困難を抱えながら、そのことがそのまま他者の援助につながるということで、援助資源が爆発的に増大するのである。

重要なのは、援助者としての役割を、SHGsの中で、参加者の人たちが見つけることである。そうした過程の中で、SHGsのメンバーは、依頼心よりも統制感を生み出す。

Rappaport (1985)によれば、

「Riessmanの主張するこのエンパワーメントは、活気がある。このエンパワーメントは、それ自体を育てると同時に政治的関連性を持つ。というのも、エンパワーメントは、人々の生活の他の側面に伝染し、広がるようになるからである。」

iv) 患者自身が全てを運営するオルタナティブの力

さらに、Rappaport (1985)は、精神医療ユーザー活動に長年携わり、国際的にもユーザー運動の発展のために活躍しているChamberlin (1979)の考えと、彼女の活動母体であるthe Mental Patients Liberation Frontの活動実践を紹介する。

Chamberlinは、クライアントの、専門職とサービスに対して持つ力について述べている。

即ち、クライアントあるいは元クライアントは、専門職のクライアントの自己実現を低くしか見積もらない傾向に対抗し、そうした傾向そのものが自己実現を阻むことを教え、自己実現のプロセスを通じてそうした見方を修正させ、自己実現の発揮のために必要な資源としての専門職の新たなあり様を教えることが出来る、とした。

また、元患者の自信と能力を促進する鍵となる意識覚醒のプロセスは、患者自身が全てを運営するオルタナティブ^(注3)によって初めて生じる。専門職は、患者のアドヴォケイト^(注4)と見なされる必要がある。

本人(当事者)達は、サービスプログラムのデザインに関わり、SHGsに参加する。彼らが自らの最大の関心をアクティブにアドヴォケイトできるようにである。

この考え方を推し進めていくと、メンバーをクライアントと見るのではなく、(援助)資源としてみる見方が、主流を成すようになる。そして、SHGsの活動は、患者自身が全てを運営するオルタナティブの活動に必要な補助金を引き出していくことに、力が注がれる。この冒険的的事业自体が、エンパワーメントをエンパワーするのである。このことは、相互援助をベースとした人々の力と尊厳に基づく新たな文化の創造に貢献する。

v) Narrative Storiesの力

ここまでエンパワーメントの理論的整備を進め、コミュニティ心理学におけるエンパワーメント理論の貢献についてまで言及したRappaportであるが、90年代に入り、今までとは違った側面から、エンパワーメントにアプローチしている。この変化の背景には、エンパワーメントの理論化が結果として、SHGsのメンバーの体験世界やSHGsのグループの展開の実際から遊離してしまったのではないかというRappaport自身の強い反省がある。

そうした反省に基づいて、Rappaport (1993, 1995)は、Narrative Stories(自らの物語を紡ぎだすこと)を提示する。物語は、新たな状況を作り出す。SHGsに参加するようなメンバーには、絶

えず更新される独自の物語が必要であるというのが、Rappaport の見方である。その新たな物語の創造に SHGs は、大いに貢献できる。

例えば、再発を繰り返すことによって自尊心を損なわれたクライアントが、自らの物語の更新を繰り返すことで、新たなアイデンティティを紡ぎ出し、自尊心の回復を手に入れるということに、物語（ナラティブ）は、貢献する。

vi) 環境に主体的に働きかける力

1997年3月23日に開催された、コミュニティ心理学シンポジウム「コミュニティ心理学におけるエンパワーメント研究の動向」における議論で、興味深かった論点が2つある。

一つ目が、山本和郎氏の提示された、エンパワーメントをコミュニティ心理学の新たな展開をもたらす、一般的な概念として位置付けるというものである。

山本氏によれば、エンパワーメントは、環境への働きかけを表現する一般的な概念となり得る。環境からサポートを引き出す、あるいは、環境を変えるという働きかけを表現するものとして。従来コミュニティ心理学で議論されてきた環境からの一方的な影響だけでなく、働きかける主体としての人間のあり様を議論する上での一般的な枠組みをエンパワーメントは、用意しているという指摘である。そうしたエンパワーメントの枠組みから、コミュニティ心理学の概念や理論を積極的に引き出していくことが必要であるという、コミュニティ心理学の将来への可能性を大いに感じさせる議論であった。

二つ目が、渡辺直登氏の提示された、エンパワーメントの実現と専門家になる事を捨てていくことを結び付けた議論である。エンパワーメントを実現していくためには、専門家になる事を捨てていく、知識や力を独占していくのではなく、専門性を捨てていく方向の専門性を発揮することが、求められているというものである。そして、実はその意味での専門性こそ発揮することが難しいという主張である。この発言には、大いに勇気づけられる思いがした。こうした認識が、日本のコミュニティシンポの場で提示されたこと自体が素直に嬉しかった。

いずれにせよ、従来の専門職中心の専門性のあり様は、変更を求められざるを得ない。ユーザーの生の体験世界の流れを尊重し、彼らのエンパワーメントの実現が保障されるような専門職の関与の仕方、そうした意味での役割の変更、サービスシステムの再編が求められている。それは、従来の専門性を捨て、新たな専門性を構成していく営みの中からはか実現され得ないように現在の筆者は感じている。

ここで、エンパワーメントに関する筆者自身の定義も紹介しておきたい。

「エンパワーメントとは、自らの内なる力に自ら気付いて、それを自ら引き出していくこと、その力が個人・グループ・コミュニティの3層で展開していくことと言えます。端的に言えば、能力の顕在化・活用・社会化です（三島、2001）。」

⑤ Rapp のストレングス・モデル

Rapp (1998) の“Strengths Model (ストレングス・モデル)”こそ、正しくエンパワーメント・

アプローチのための理論と実践の書である。極めて具体的で実際的な記述や事例にあふれている。この書を読むと、今まで「エンパワーメント・アプローチ」として語られていたものが、いかにムードに流され、具体性に欠け、実態を伴わないものであったかを認識せざるを得ない。

この書に取り組む中で、筆者自身（三島、2000）、今まで自らを支えてきた「専門性」というものを根本的に問い直さざるを得なかった。Rapp が主張する“Strengths Model（強化モデル）”は、従来の専門職のアプローチに決定的なパラダイム・シフトを迫るものである。

現在語られているケースマネジメントのほとんどは、この書が批判する当事者の病理や障害を強調する欠陥モデルと、それを埋め合わせるためのサービスの組み合わせ（仲介モデル）である。

Rapp はこれに対し、豊富な臨床実践の中から、当事者の持つ力と彼らを取り巻く環境の持つ力とに注目し、安易に仲介モデルに墮することなく、個々の当事者の願いをなるだけその地域の主流の文化になじむ形で、地域の一般住民との間で充足させていくケースマネジメントとして“Strengths Model（強化モデル）”を提示した。

“Strengths Model（強化モデル）”の実践の中では、当事者の実生活上の実際的な目標に焦点が当てられることで、当事者は受動的なサービス受容者から、自らのサービスの進行管理者へとその地位を高める（エンパワーメント）。

Rapp は、従来の援助モデルである欠陥モデルとそれに基づく仲介モデルが、いかに当事者の無力化をもたらしてきたかを徹底的に批判している。この辺りの記述は、Rappaport（1981）がエンパワーメントの概念を紡ぎだしてきた道程と共通するものがある。実際、Rappaport からの引用も多い。エンパワーメント・アプローチの構築には、従来モデルへの徹底した批判・脱構築から始める以外に無いというのは、エンパワーメントに関心を寄せる人々の間の共通認識になりつつあるのを感じた。

ストレングス・モデルの基礎として、個人の強さとして熱望・能力・自信、環境の強さとして資源・社会関係・機会を挙げ、それらの相互作用の中で個人の生活空間は構成され、その中身の豊かさによっていかに当事者の生活の質が左右されるかを描き出している。その中では、より主流の文化となじむ形で当事者の要望が満たされることが大事なのであり、同じような当事者や精神保健の援助者とだけの関りのみしかもたらさないサービスは、可能性が閉ざされていると言える。それらは決して「地域社会」ではない。

Rapp は、リフレーミング^(注5)と強さ志向との相違を問題にしている。強さ志向は、純粹にクライアントの強さと回復力に、実体のあるものとして焦点を当てる。強さや回復力の増大は、相対的に問題を縮小させる。ストレングス・モデルへのパラダイム・シフトは、クライアントの欠点ではなく、技能や能力、才能を評価する新しい創造的なかわり方をもたらす。

ストレングス・モデルでは、個別性と主流の文化となじむ形での要望の実現を一般住民との間で図ろうとする。

Rapp は、クライアントとの間での新しいパートナーシップを問題とする。相互交流の中でクライアント自身が「勝者のような実感」を得ること、契約についての特別な方法の追加が提案される。

例えば、契約の交わされる場所としては、クライアントが指定した場所と時間で行うのが望ましいといった具合である。クライアントは援助における監督であり、彼らはその内容と進み方、場所、資源、目的を決定する。

強さの評価では、個人のよい部分を拡大する具体的な方法について議論される。強さの評価は、毎日の生活状況・経済／教育・社会的または宗教的援助・健康という6つの生活領域に分けて評価される。これらは、クライアントが最も関心を持っている生活領域に対応している。それぞれの生活領域は、さらに、現在の状態・希望と熱望・過去という3つの時間的分類に分けられる。これは、「強さの評価用紙」として一覧表にされる。この評価表は、クライアントとケースマネージャーの間に置かれ、どちらが記録者になるかはクライアントに選択がゆだねられている。ケースマネージャーは、何を記録しているかクライアントに話す（そしてそれが正しいかクライアントと確認する）機会を頻回に持つべきとされる。これは、従来型の評価手順が、すべて専門家が情報を記録することを要求していたことを考えると、画期的なことである。強さの評価はクライアントに所属していることを体現していると言える。そして、強さの評価の最終的に目標とするところは、長く忘れ去られていた過去の成功がよみがえり、成功への期待が拡充し、さらには、生活史の自己認識が変化することである。自らの物語の書き換えを行える能力・強さがクライアントにはある。

個人計画では、達成計画の立て方の具体的な手続きが示される。クライアントが目標達成に失敗した理由は、ほとんどの場合、すべての人が失敗したのと同じ理由であるが、伝統的また典型的な精神保健活動がこれらの原因を悪化させる、ないしはもたらすことがある。なぜなら、精神保健活動がしばしばクライアントに低い期待しか持たず、彼らの意欲をそいだり、目標の論理的段階を押し付けることで、クライアントの切実な要望を取り上げなかつたりするからである。

目標設定は、長期目標と短期目標に分けられる。長期目標はクライアントの正直な抱負である。この記述は、専門家の言葉で翻訳しないことが大事である。短期目標は、目的（長期目標）達成の手段であると同時に、それ自体が目的でもある。この時、どんな小さな短期目標にも、強さと社会資源を活用した個人計画を立てることとする。このことの実現のためには、クライアント独自の強さの布置を知らなくてはならない。

第7章「資源の獲得：地域を地域精神保健の中に入れる」は、この書の中心を成すものと筆者は考える。個人向けのアプローチとコミュニティへのアプローチがバランスよく記述され、Rappの考え方が凝縮されている。

ここでは改めて精神保健システムが、そこに内包する2つのスティグマ^(注6) (1. 精神疾患を持つ人は分別のある選択ができない。2. 精神疾患を持つ人はあまりにも障害されているので、普通の居住生活、仕事、社会的関係を営むことができない)により、犠牲者を非難し、環境を非難し重篤な精神疾患を持つ人を、隔離された環境、可能性の閉ざされた空間に押し込めることになっていること、そして、そこでは回復の望めそうにないことが強調されている。

地域の中で当事者の生きていく上での「完璧な生活空間」を見出すことが、最も優先される援助となる。「完璧な生活空間」とは、周囲からもクライアントからも調整が必要とされないか、ある

いはそれがほとんど重要でなく、周囲から要求されることとクライアントの欲求、才能、特質が完全に一致する生活空間である。

ストレングス・モデルの基本的な仮定は、地域への統合と適応は精神保健システムから離れて初めて起こり得るということである。援助者は「普通の」資源と自然に生じてくる援助（例：家族、友人、隣人）を利用することから始めなければならない。援助職の仕事は、クライアントの適切であるという感覚、能力感が尊重されるように、「正常な」周囲が定めた社会の要求にクライアントが応えるために必要な機構を構築することである。これはしばしば、クライアントと周囲の人が適応努力を行う時に、クライアントの要求に周囲を適合させ、クライアントと周囲の人双方に援助を提供するため、環境調整に関わるということの意味する。

地域の世話役を巻き込む革新的地域戦略は、コミュニティ・アプローチに満ちている。資料に基づく技法は、データベースド・アプローチであり、カブルチャー技法は、問題解決のためのコミュニティの責任の強調である。市民講座は地域住民を講師に「壁のないプログラム」を作るし、選択肢の創出は、仕事を創り出し、クライアントがその仕事に就くことを支援する。多くの点でそれは、「完璧な生活空間」を創り出すための組織的な試みである。

ストレングス・モデルは、地域、統合、資源に対する劇的で新しい見方を必要とする。クライアントの真の地域統合を成功裡に達成するために必要な戦略、技術、判断は、臨床実践に必要とされるのと同じくらい、複雑で要求水準の高いものである。

ストレングス・モデルのケースマネジメントが、適応と再適応に関するものであり、その焦点は、目的達成、エンパワーメント、生活の質（QOL）に置かれ、疾病に置かれないこと、そして、その実践の土台となるのが、誰もが真の才能、技能、適性を持っているという人間観であり、その目的とするところは、再構成（リフレーミング）ではなく、個人のよい部分を構成している要素を確認する作業であることが強調されている。

病理モデルでなく、当事者の持つ能力・強さに注目し、それを拡大・強化することで問題を相対的に小さくし、当事者の健康の保持・増進を図るとするのは、80年代以降の臨床的アプローチのひとつの大きな流れになっているように感じられる。ただし、ストレングス・モデルでは、それをリフレーミングではなく、徹底して実体のあるものとして扱うこと、そして、コミュニティへの戦略にあふれていること（第7章参照）が、特筆すべき点である。以上の点から、極めてコミュニティ心理学的なエンパワーメントの書である。

Ⅲ. 社会福祉における人間観

社会福祉の人間観を検討する時に特徴的なのは、人間観がダイレクトに扱われることの少ないことである。そこには、社会福祉が援助の対象とするクライアントのあり様（例えば、社会的弱者、少数者、貧窮者）が、大いに影響していることが予想される。福祉領域では、援助関係の中の援助観・実践モデルを通して、間接的に、人間観が問題にされる場合が多い。その場合に、クライエン

トより、援助職のあり様・関わり方の方が、多く問題にされるのが特徴である。

ここでは、小松(2002)、狭間(2001)、久保・副田(2005)ら、嶋田(1999)らの言説から、福祉における人間観・援助観を検討したい。

小松(2002)によれば、エンパワーメント・アプローチは、「専門家」(エキスパート)であることを捨て去り、利用者が関係に持ち込んでくる多様な技能や知識を尊重する。また、利用者の、環境に順応するよりむしろ、環境に働きかけ、環境を変えていく能力を高めるとする。山本(1997)の主張する、環境に働きかける主体としての人間のあり様や、渡辺(1997)の言う、専門職であることを捨てていく専門性のあり方の議論に通じるものがある。

また、Saleebey,D.(1997)によって、復元力(レジリエンス)^(注7)の概念が提示され、エンパワーメントと共に、Goldstein,H.(1997)によって重要視されるようになってきており、現時点においてストレングス視点の「鍵となる概念」の中核に位置づけられるようになってきていることを紹介している。

7章「ソーシャルワーク実践におけるエンパワーメント・アプローチの動向と課題」では、小松(2002)は、まず、Hasenfeld,Y.(1987)を引いて、エンパワーメントを礎石にしたソーシャルワーク実践を展開していく必要性を明らかにしようとしている。また、ここでは、ストレングス・モデルとエンパワーメント・アプローチの相互連関と発達が強調されている。エンパワーの重要性が認められ、その適用が積極的に図られるようになっていく点を確認できる。エンパワーメントの集団場面が重要視されており、そうした中でセルフ・ヘルプ運動／ソーシャル・サポート運動への注目がなされている。更にエンパワーメント・アプローチは、社会変革を中心に据えることが求められている。

狭間(2001)の記述の中でも、第8章「エンパワーメント・アプローチにおけるストレングス視点の意味」にとりわけ注目した。狭間(2001)の指摘を待つまでもなく、エンパワーメント・アプローチとストレングス視点は、非常に親和性が高い。Goldstein,H.(1981)は、ワーカーが、クライアントにとっての現実である「生活の意味づけ」を理解することを強調した。クライアントが個人・集団・コミュニティの3層で相互連関的に問題に対処できるようなパワーを獲得できるように側面から支援することが必要であり、それは今日の「エンパワーメント・アプローチ」の主張に一致する。

ストレングス視点は、米国のソーシャルワーク実践において、1980年代後半から提唱され始めた。これは、60年代の公民権運動などを契機とした、専門職のもつ権威などへの批判に対するひとつの答えとして、専門職のあり方をとらえ直したアプローチだといえる。ストレングスと病理を対比させることで、その特徴を明確にしようとする社会構成主義^(注8)は、知識は人々の社会的相互作用を通して形成されると見なす。そして、ストレングスは、人々の日常生活の中で、生活の困難に対処し、生き残る能力を表す言葉として用いられてきた。

エンパワーメントとストレングスの関係については、ストレングスは、エンパワーメント実践を行っていくための土台と見なされている。

エンパワーメントは、病理的視点を排除したところに成り立つ。この点を明確にするために、エンパワーメント・アプローチの基盤にストレンクス視点は不可欠である。

また、援助場面の中で様々に語られるクライアントのライフストーリーを、共感的理解というレベルを超えた、意味の理解へと導くための技法の形成が必要とされ、その援助技法の構築を、狭間は、今後の研究課題にしたいとしている。

久保・副田（2005）編著の、主に、第11章「エンパワーメント・アプローチ」（和気、2005）と、第12章「構成主義・ナラティブ」（稲沢、2005）に注目した。和気（2005）もエンパワーメント・アプローチの起源を、様々な社会運動に見ている。セルフ・ヘルプや障害者運動の権利主張もその流れにある。また、これらの運動は援助専門職の存在意義を問い直した。当事者の主体性と専門職の役割を再定義した。

特に SHGs は、専門職を含まない当事者らによる援助活動の有用性を示した。当事者主体へのパラダイム転換を果たした。

社会構成主義やポストモダニズム^(注9)は、共にソーシャルワークにおける問題認識に強い影響を及ぼした。即ち、従来の専門家が客観的に問題を把握し、その合理的解決に当たるとされた前提に取って代わり、当事者の立場から構成される「オルタナティブ・ストーリー」の構築が、当事者の自己実現や正当化を推し進めるとされる（和気、2005）。

エンパワーメント・アプローチにおいては、「パワー」を複眼的に、その構造を体系的に理解することが求められる。エンパワーメントは、社会のメカニズム自体に構造的な変化をもたらすこと（社会変革）が志向される。

エンパワーメント・アプローチは、個人と社会の相互作用に介入することを重視する。当事者の問題の解決に必要なスキルは、SHGs との関わりや相互作用によって高められる。変革の目標は、個人のみならず、団体や機関にも向けられる。問題のアセスメントに当たっては、問題を当事者の視点から把握することに力点が置かれ、挑戦課題の達成に必要な当事者の強さ（ストレンクス）をアセスメントすることが強調される。さらに、介入の実施に当たっては、既存の資源のみならず、潜在的な資源の創造や開発にも力が注がれる。

ストレンクス・モデルや社会構成主義の下で発展しているナラティブ・モデルなどは、いずれもエンパワーメント・アプローチの中に取り入れられ、重要な構成要素になっている（和気、2005）。

物語に焦点を当てる援助は、固定化された物語をより柔軟なものに書きかえていくことが目指される。即ち、物語の書きかえを援助することなのである（稲沢、2005）。

嶋田啓一郎（1999）らの中で、第8章「ソーシャルワークにおけるエンパワーメントのもつ人間観—クライアントの主体性をめぐって—」（久保美紀、1999）に特に注目した。久保はまず、福祉が問題とする主体、そして主体性のあり様を議論する。

ソーシャルワークの究極的な目的は、クライアントの主体形成を基礎とする自己実現の確立であ

る。そうした社会福祉に見られるエンパワーメントの人間観は、クライアントの強さ（ストレングス）に着目し、クライアントが自らの生活の支配権を獲得するのを援助し、かつ社会問題への認識を深め、社会正義（不平等なパワー関係の修正）を促進することにある。それは社会福祉の向上、個人の生存権及び幸福追求権の保障を前提とする（久保、1999）。

同様の記述は和気（2005）にも見られる。エンパワーメント・アプローチにおいては、対等なパートナーシップとそれに基づく開かれた対話、合意の形成が目指される。エンパワーメント・アプローチの実践に当たっては、当事者の自己決定と自己実現を重視し、社会正義を追求するとしたソーシャルワークの価値や倫理が尊重されることが、極めて重要となる。

考 察

こうして、臨床心理学、コミュニティ心理学、社会福祉の3領域を並べてみると、その人間観には、通底するものが見い出せる。人間のもつ自己実現傾向を出発点とし、80年代には、様々な社会的運動体の中で力を獲得していく当事者の姿に触れることで（この頃、クライアントをユーザーと呼ぶことが一般化した）、専門職の援助モデル、その基底となる人間観が変わらざるを得なかったことが、うかがえた。それについては、多く、エンパワーメントの項目で詳しく見た通りである。即ち、「我々は、文化的代替物（cultural alternative）を開発し、我々自身と他者をも助け得る我々自身の力に関する信念についてのシンボルと言語を創造しなくてはならない（Rappaport,1985）。」これからは、SHGsのメンバーをクライアントと見るのではなく、援助資源としてみる見方が、主流を成すようになる。この冒険的事業自体が、エンパワーメントをエンパワーする。このことは、相互援助をベースとした人々の力と尊厳に基づく新たな文化の創造に貢献する。

Rappaport（1987）によれば、エンパワーメントは、人々の力に対する信念、人が自らの運命の主演であること、自らの関わるコミュニティの生活に自ら関わること、によって貫かれている。

90年代に入り、Rappaport（1993, 1995）は、Narrative Stories（自らの物語を紡ぎだすこと）を提示する。物語は、新たな状況を作り出す。SHGsに参加するようなメンバーには、絶えず更新される独自の物語が必要であるというのが、Rappaportの見方である。

Narrativeとエンパワーメントの関連は、SHGsに参加する個々のメンバーや、SHGs自体をエンパワーする活動として位置付けられる。物語ることの役割を理解するための全般的なモデルの特徴、そして、アイデンティティの移行を通じての個人の変化は、SHGsの文脈の中で描かれる。

90年代後半に、Rapp（1998）がストレングス・モデルを提示すると、エンパワーメントとストレングス・モデルを結び付ける議論が、活性化する。エンパワーメントとストレングスの関係については、これまでに、既に詳細に扱ってきたので、簡単にしか述べないが、ストレングスは、エンパワーメント実践を行っていくための土台と見なされている。挑戦課題の達成に必要な当事者の強さ（ストレングス）をアセスメントすることが強調される。

以上、改めて、相互に結びつきの強い、エンパワーメント、ストレングス、ナラティブの各領域

における議論の展開と、それに基づく人間観の変遷を整理した。

エンパワーメントがプロセス志向であるだけに、何をもって効果の指標とするのかを明らかにすることが困難であることも、実証研究の遅れを招いている一因である。効果の有無や効果をもたらす諸要因の分析が進まなければ、エンパワーメント・アプローチが理念に終始してしまうことになりかねない(和気、2005)。

エンパワーメントと類似概念との間の検討は、田中(1997)が展開している。

また、福祉領域の研究で、エンパワーメントの因子構造を明らかにした研究がいくつか見られるが(久保2001、栄2003)、いずれも当事者の獲得したエンパワーメントを問題にしているのではなく、現場実践者の考えるエンパワーメントの構造を問題にしている。その点が限界である。

筆者はSHGsの中での当事者のエンパワーメントの獲得を測定する尺度の開発を試みた。信頼性・妥当性とも十分なものが得られたが、当事者のエンパワーメントの因子構造の解明には、至っていない(三島、1999)。

(注)

- (注1) 効果のない物質を効果のある薬物として患者に投与すると、時に心理効果により症状を軽減することがある。この効果のこと。
- (注2) 自尊心。自尊感情。
- (注3) 代替物。
- (注4) 本来個人が持つ権利を様々な理由で行使できない人に代わり、その権利を代弁・擁護し、権利実現を支援する機能をアドヴォカシー(advocacy)、代弁・擁護者をアドヴォケイト(advocate)と呼ぶ。「弁護・支持・唱導・主張」し、「権利擁護のために闘うこと」であり、“to call”(声を上げる)を意味するラテン語“voco”に由来する。
- (注5) ある枠組み(フレーム)で捉えられている物事を、枠組みを外して、別のより健全で適応的な枠組みで見るとの働きかけを指す。元々は、家族療法用語。
- (注6) 烙印。恥辱。汚名。負の印。アメリカの社会学者ゴフマンが用いた。
- (注7) 「外力(ストレス)による歪みを跳ね返す力」精神医学では、Bonnanno,G.(2004)が述べた「極度の不利な状況に直面しても、正常な平衡状態を維持する能力」という定義が用いられることが多い。「脆弱性(vulnerability)」の反対の概念であり、自発的治癒力の意味である。
- (注8) 社会構成主義は、本質主義に対立する概念としてポスト構造主義の思想家により提唱されたもの。心理学者のケネス・J・ガーゲンが、社会構成主義に新たな見方と存在価値を与えた。ガーゲンは、「人々はお互いの言葉のやり取り(対話/ダイアログ)の中で『意味』を作っていくのであり、『意味』とは話し手と聞き手の相互作用の結果である」と結論づけた。そしてこれを、Words create world(言葉が世界を作る)と表現した。
- (注9) 『ポストモダンの条件』(1979)を著したリオータルによれば、「ポストモダンとは大きな物語の終焉」なのであった。例えばマルクス主義のような壮大なイデオロギーの体系(大きな物語)は終わり、高度情報化社会においてはメディアによる記号・象徴の大量消費が行われる、とされた。この考え方に沿えば、“ポストモダン”とは、民主主義と科学技術の発達による一つの帰結と言える、ということだった。ポストモダニズムは、合理的でヒエラルキー的思考の態度に対する再考を中心としつつも、重点は論者により様々であった。それ故、明確な定義はないといつてもよいが、それは、近代的な主体を可能とした知、理性、ロゴスといった西洋に伝統的な概念に対する異議を含む、懐疑主義的、反基礎づけ主義的な思想ないし政治的運動というおおまかな特徴を持つということが出来る。

引用文献

- Chamberlin,J. 1979 On Our Own : Patient Controlled Alternatives to the Mental Health System. New York : McGraw Hill.
- (中田智恵海 監訳 1996 『精神病患者自らの手で』解放出版社)
- Goldstein,H.,1981 Social Learning and Change: A cognitive humanistic approach to human services, University of South

- Carolina,1981,p438.
- Goldstein,H.1997 “Victors or victims?”, In Saleebey,D. (ed) ,The Strengths Perspective in Social Work Practice, 2nd. ed.Longman.1997.
- Hasenfeld,Y.1987 “Power in social work practice”, Social Service Review,61,469-483.
- 狭間香代子 2001 『社会福祉の援助観—ストレングス視点・社会構成主義・エンパワメント』 筒井書房.
- 稲沢公一 2005 「第12章 構成主義・ナラティブ」 久保・副田編著 2005 『ソーシャルワークの実践モデル—心理社会的アプローチからナラティブまで』 川島書店, 227-250.
- 小松源助 2002 『ソーシャルワーク実践理論の基礎的研究—21世紀への継承を願って』 川島書店.
- コミュニティ心理学シンポジウム 1997 「コミュニティ心理学におけるエンパワメント研究の動向」 3.23.1997.
- 久保絃章・副田あけみ編著 2005 『ソーシャルワークの実践モデル—心理社会的アプローチからナラティブまで』 川島書店.
- 久保美紀 1999 「第8章 ソーシャルワークにおけるエンパワメントのもつ人間観—クライアントの主体性をめぐって—」 嶋田啓一郎 [監修] 秋山智久/高田真治 [編著] 1999 『社会福祉の思想と人間観』 ミネルヴァ書房, p.134-148.
- 久保美紀 2001 エンパワメント概念の構造にかんする研究—ソーシャルワーク実践理論としてのエンパワメント—. 明治学院論業社会学・社会福祉学研究, 110,p.175-195.
- 三島一郎 1997 コミュニティ心理学におけるエンパワメント研究の動向—エンパワメントの理論面から. コミュニティ心理学研究, 1 (2), 141-151.
- 三島一郎 1999 セルフ・ヘルプ・グループの Empowerment 機能に関する研究—精神障害回復者クラブとそのメンバーの Empowerment に関する評定研究. 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士論文.
- 三島一郎 2000 書評 チャールズ A. ラップ著 江畑敬介 (監訳) 濱田龍之介・辻井和男・小山えり子・平沼郁江 (訳) 『精神障害者のためのケースマネジメント』 (1998年11月, 金剛出版, 270頁). コミュニティ心理学研究, 3 (2), 118-121.
- 三島一郎 2001 第10章 精神障害回復者クラブ—エンパワメントの展開: 『臨床心理学的地域援助の展開—コミュニティ心理学の実践と今日的課題』 山本和郎編, 2001, 培風館. 164-182.
- Rapp,C,A.1998 The Strengths Model: Case Management with People Suffering from Severe and Persistent Mental Illness., New York., Oxford University Press (224pp.ISBN 0-19-511444-2). チャールズ A. ラップ 1998 『精神障害者のためのケースマネジメント』 江畑敬介 (監訳) 金剛出版.
- Rappaport,J.1981,In Praise of Paradox : A Social Policy of Empowerment Over Prevention. American Journal of Community Psychology,9 (1), 1-25.
- Rappaport,J.1985 The power of empowerment language. Social Policy,16,Fall,15-21.
- Rappaport,J.1987 Terms of Empowerment/Exemplars of Prevention : Toward a Theory for Community Psychology. American Journal of Community Psychology,15 (2), 121-148.
- Rappaport,J.1993 Narrative Studies, Personal Stories, and Identity Transformation in the Mutual Help Context. The Journal of Applied Behavioral Science,29 (2), 239-256.
- Rappaport,J.1995 Empowerment Meets Narrative : Listening to Stories and Creating Settings. American Journal of Community Psychology,23 (5), 795-807.
- Rappaport,J.,Davison,W.S.,Wilson,M.N.,&Mitchell,A.1975 Alternatives to blaming the victim of the environment: Our places to stand have not moved the earth. American Psychologist,40,525-528.
- Riessman,F.1985 New Dimensions in Self-help .Social Policy,15.Winter,2-4.
- 栄セツコ 2003 エンパワメントアプローチに基づく精神保健福祉実践活動—精神科ソーシャルワーカーの活動の現状とその活動に関連する要因—. 精神保健福祉, 34 (4) .341-350.
- Saleebey,D.1997 “Introduction: Power in the people”. In Saleebey,D. (ed.), The Strengths perspective in social work practice,2nd.ed.,Longman.9-10.
- 嶋田啓一郎 [監修] 秋山智久/高田真治 [編著] 1999 『社会福祉の思想と人間観』 ミネルヴァ書房.
- 田中英樹 1997 地域精神保健福祉領域におけるエンパワメント・アプローチ—コミュニティ・ソーシャルワーカーの立場から—. 精神障害とリハビリテーション, 1 (2), 135-146.
- 友田不二男 1970 『非指示的療法』 財団法人日本カウンセリング・センター. p3.
- 台利夫 2011 『心理療法にみる人間観—フロイト、モレノ、ロジャーズに学ぶ』 誠信書房.
- 和気純子 2005 「第11章 エンパワメント・アプローチ」 久保・副田編著 2005 『ソーシャルワークの実践モデル—心理社会的アプローチからナラティブまで』 川島書店, 205-226.
- 山本和郎 1986 『コミュニティ心理学—地域臨床の理論と実践』 東京大学出版会.
- 山本和郎 1997 討論 エンパワメントの概念について. コミュニティ心理学研究, 1 (2), 168-169.

(2018年9月27日受理)